グリーン四国

No.1257
2024年
12月号

地域林業の発展を目指して
～林業成長産業化構想を学ぶ～

【詳細は2頁】

瓶ケ森から石鎚山を望む

目　次

・地域林業の発展を目指して～林業成長産業化構想を学ぶ～ …… 2
・昔の大鋸で丸太切りに挑戦 …… 3
・架線集材箇所での現地勉強会を開催 …… 4
・大月町西泊地区でのウバメガシ植栽事業に参加 …… 5
・白髪山から絶景「どれが剣山やろか」 …… 6
・「山は海の恋人」物部川流域の森づくり講演 …… 7
・幡多農業高校生徒が環境学習をしながら三本杭へ登山 …… 8
・1㎥を削り出せ …… 9
・管内の見所紹介 …… 10

四国山の日

四国森林管理局
高知市丸ノ内１丁目３－30
ＴＥＬ 088－821－2052
Ｈ　Ｐ http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/
E-mail shikoku_soumu@maff.go.jp

地域林業の発展を目指して
～林業成長産業化構想を学ぶ～

＜森林技術・支援センター＞

11月12日～15日の4日間、「林業成長産業化構想技術者育成研修」の四国ブロック研修が開催されました。

この研修は、林道・路網設計ソフト（FRD）や森林資源を把握する地理情報システム（QGIS）等の支援ツールを活用して、森林資源や地形の把握を行い、10～20年後を視野に入れた林道整備計画や地域の特性を考慮した森林整備計画の構想を検討・作成し、林業成長産業化に資する技術力の向上を目的として実施されています。

四国ブロック研修は、高知県中土佐町にある新道山国有林と隣接する民有林を演習地として、およそ1100haの森林について10～20年先を視野に入れて立てた全体構想を踏まえて、林業専用道計画と森林整備計画をとりまとめ、研修最終日に中土佐町の林務担当者にプレゼンテーションを行う設定で実施しました。

受講生は鳥取県職員1名、愛媛県職員1名、京都府南丹市職員1名、徳島県三好市職員2名、徳島県三好市内の林業事業体5名、国有林職員3名の合計15名が3班に分かれてグループワーク形式で4日間の研修を受講しました。

林道線形を検討中

初日は、外部講師として森林総合研究所四国支所の大谷グループ長により「地域特性に応じた森づくりの構想」と題した森林の目標林型や、ニホンジカによる森林被害の講義を受けました。その後、演習地の説明やQGIS、FRD等の支援ツールを使用して林道路線の線形を検討しました。

2日目の午前中は、中土佐町の新道山国有林でドローンを飛行させ、研修フィールド（団地）の森林資源状況の確認や路網設置の可否等を確認しました。また、四国森林管理局の森林整備課清岡専門官が林道の勾配、令和4年度の災害復旧工事箇所について、説明を行いました。午後からは喜代須山国有林に移動し、「森づくりの検討」を行い、事前に準備した標準地を森林3次元計測システム「OWL」（地上波レーザー）を用いて計測した調査データを参考に、調査プロットの林分状況を把握して現在の森林現況を評価し、周囲の状況や森林の機能等を考慮した「森づくりの検討」について、各班の検討結果をパネルにまとめて発表しました。

森づくり検討の発表

3日目は、演習地の森林整備計画や木材生産計画（5年分）及び林業専用道路網計画（10年分）をFRDやQGIS等を使用して各班の構想をまとめて、最終日の中土佐町林務担当者に向けたプレゼンテーションの資料を作成しました。

最終日は、各班が演習地の林道・

森林整備計画等の構想についてプレゼンテーションを行い、発表に対して活発なディスカッションが行われました。各班の発表内容は、それぞれの個性がでた素晴らしいプレゼンテーションとなりました。

4日間の研修を終えて、受講生からは「路網の長期的な配置計画は初めてだったので勉強になった」、「ドローンの映像と地図が合うよう訓練をして普段から活用したい」、「QGISの操作方法を学ぶことができ、日ごろの業務に活かしたい」、「森林総合監理士の資格を取得したい」等の感想が聞かれるなど、有意義な4日間の研修を修了しました。

最後に、この研修から学んだことや、感じたことを地域林業の成長産業化に活かして頂きますよう、受講生の今後のご活躍を期待しています。

昔の大鋸で丸太切りに挑戦

〈高知中部森林管理署〉

11月16、17日の両日、香美市物部町大栃の「奥物部ふれあいプラザ」で開催された令和6年度物部地区文化展に参加しました。

初日は、時折小雨が降るあいにくの天気でしたが、2日目は快晴に恵まれ2日間を通してたくさんの方々の来場がありました。

当署は、国有林の仕事などを紹介することとして、屋外と屋内にそれぞれブースをいただき、屋内では、「30年前の三嶺と現在」や管内でのボランティア活動の写真と獣害対策の取り組みなどについて展示しました。

また屋外では、のこぎりを使った丸太切り体験を行いました。2日間を通してたくさんの方に丸太切りに挑戦してもらいました。中には、展示用の刃渡り80㎝余りある「大鋸で挑戦したい」と志願する方も現れ、これにはブース内も大きな盛り上がりを見せ、昔の大鋸を見て懐かしがる地元の方々も加わり、「この大きなのこぎりを使って伐倒しよったがで」、「違う違う、もっと平行に引かな」などの挑戦者へのアドバイスの声を聞いて、当署職員もその技術を教わるというどちらが出展者か分からなくなる場面もありました。

このほか、家族連れでの参加もあり「お父さん・お母さん・娘さん」と力を合わせての丸太切りに、ほのぼのとした様子を覗うことも出来ました。

挑戦者には、恒例の接着剤でクマ・ウサギ・タヌキなどの置物が簡単に作れる木をプレゼントとして渡し、多くの方に喜んでいただきました。また、今年はブース内でパイン松の大きな松ぼっくりにビーズや綿で飾り付けするクリスマスツリーの作成も行い「思い思いのツリー」を持ち帰りいただきました。

当署では毎年このイベントに参加しており、シカ被害の現状や国有林の役割などについて、今後も積極的に情報発信し、物部地区の森林環境の保全等の取り組みについて引き続き協力をしてまいりたいと思います。

架線集材箇所での現地勉強会を開催

〈四万十森林管理署〉

11月6日、高知県津野町ヤカラミ山国有林の請負事業実行箇所において、当署管内の森林官、若手職員など34名が参加し、「架線集材における現地勉強会」を開催しました。

最初に、監督職員から当該箇所における事業の概要、架線集材の特徴の説明を行うとともに、架線による集材方法は林地を傷つけることが少なく水源地や山地災害危険地区の上流域では非常に有効な木材搬出の手段であることなどの説明が行われました。

続いて、事業実行事業体である津野町森林組合の現場代理人より、架線集材による木材搬出からプロセッサによる枝落とし、玉切りまでを実際におこなってもらった後、集材架線の索張りの手順、集材機の動きなどをそれぞれ説明いただくとともに、集材機周辺の設備、元柱付近まで移動して使用しているホイスチングキャレッジ（アベックキャレッジ）を間近で見て動作状態などの説明を受けました。

プロセッサ試乗

集材機説明

キャレッジ説明

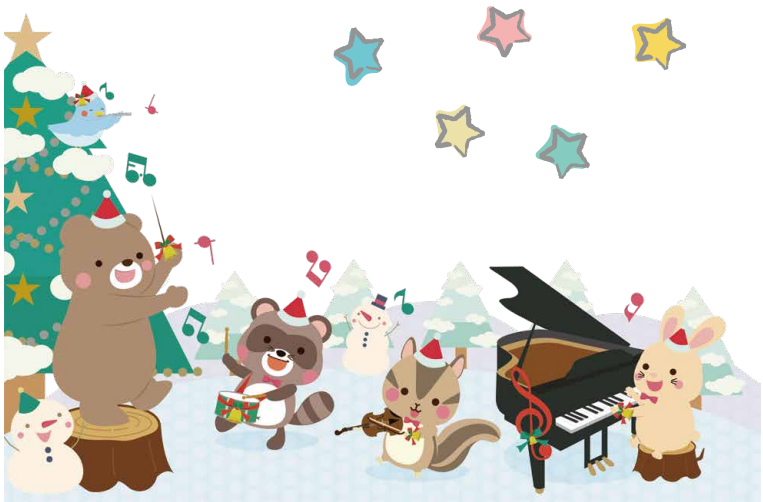
若手職員からは、集材設備に係る日数や最近導入された繊維製ロープの使用に関して質問が出されていました。

最後に、森林計画を担当する職員から、次期の施業実施計画策定の準備として、林地保全に配慮した施業の推進について説明し勉強会を終了しました。

近年、当署管内で請負事業により実施している木材の搬出方法は、効率的で生産性の高さから車両系の林業機械による搬出が9割以上を占めており、今年度の架線による木材搬出は、当該箇所のみであり、若手職員をはじめ中堅職員も架線集材を実際に見る機会がほとんどなくなってきています。

今回の勉強会は、国有林における林地保全に配慮した施業を推進する上で、重要な搬出方法となる架線集材の特徴や使用する機械などを間近で見て説明を受けるなど非常に有意義な機会だったと考えています。

四万十森林管理署では、これからも林地保全に配慮するとともにより効率的な施業の推進に向けて取り組んでまいります。



大月町西泊地区でのウバメガシ植栽事業に参加

〈四万十森林管理署〉

11月11日、高知県大月町西泊地区の民有林において「大月の製炭学習と里山への植栽事業」と題して植樹活動が行なわれました。

今年で12回目となる今回は、幡多農業高等学校グリーン環境科1年生や大月町立大月小学校4年生32名と中国四国農政局高知県拠点、高知県幡多林業事務所など、総勢約70名が参加し、四万十森林管理署からも6名が参加しました。

開会式では、大月町備長炭組合濵田組合長より、大月町の製炭業や植樹祭の歴史について、また製炭材料であるウバメガシの循環的な利用について説明がありました。

その後、ウバメガシの植樹を行うため大月町西泊地区にある民有林に移動し、初めに、黒潮実感センターの方から「海と山のつながり」というテーマで講義を行い、次に、当署の伊勢脇係員が講師となり国有林でのウバメガシに関する取組、大月町の試験地の設定について紹介しました。

植樹の際の注意点などは、高知県森林技術センター職員より説明があり、小学生と高校生がペアになって植栽を行いました。

前日の雨の影響が少なく植栽を行いやすい環境になっており、準備された200本の苗木の植樹が終了しました。

午後からは、ウバメガシの苗木づくりに取り組みました。幡多林業事務所の職員が講師となり、コンテナ苗用のトレイへの土の入れ方やドングリの置き方などの注意点を教えてもらった後作業を行いました。

参加者は、講師の方の話を聞きつつ、楽しそうに苗木づくりに取り組んでおり、1920本となる48枚のコンテナトレイを作成しました。

当署としても引き続きこのような地域と連携した森林づくり（植樹）を通して、地元の方達と触れ合える取り組みに積極的に参加していきたいと思います。

白髪山から絶景「どれが剣山やろか」

〈高知中部森林管理署〉

晴天に恵まれた10月12日に、高知県香美市主催（運営：NPO法人いなかみ）のイベント「かみめぐり」のプログラムのひとつとして「物部川上流の白髪山（しらがやま）の登山を通じて、水の流れや生き物の声を感じて学ぶ登山ガイド」が「かみめぐり」事務局とともに当署の職員（4名）が登山時の案内や安全指導等のサポートスタッフとして加わり開催されました。

今年で3回目を迎える「かみめぐり」は同市の人々が案内人となって、「あちこちで楽しい体験型観光イベントを開催する」という内容になっています。35プログラムある中のひとつで、この登山ガイドには県内外から定員いっぱいの10名の応募がありました。

今回登った白髪山（標高1769.7m）は、旧・物部村に位置する剣山系の山で、四国百名山に選ばれています。昔は麓（ふもと）から4時間以上もかかるベテラン向けの山だったようですが、この山の南面を巻く峰越林道が開通し、林道には案内標識、登山口には駐車場・トイレが整備され、今では40分ほどで登られるようになっています。

初めに、かみめぐり事務局の小野川様から開会の挨拶があり、その後、準備運動で体をほぐし出発しました。道中は、「シカの鳴き声が聞こえんね」「森下さんシカを連れてきてくださいよ！」と会話がはずみ、当署の森下首席森林官を先頭に参加者は和気あいあいと登山を楽しんでいる様子でした。

山頂に着くと、白髪山と書かれた看板や、三嶺（さんれい）の山を背景に思い出の一枚として写真に納めていました。また北側にある大岩の上からは山嶺や遠くに剣山、眼下には西熊渓谷が一望でき、「どれが剣山やろうか」「次はあの三嶺やね！」と参加者たちは声を弾ませていました。

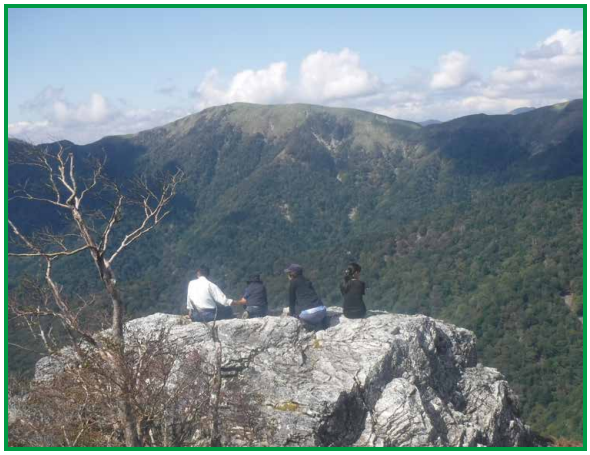
昼食後は、森下首席森林官から山の魅力や、シカの生態と山頂から見える山々の紹介など行いました。参加者からは「どのくらいの頻度で山を登っているのですか？」「普段はどのような山を登っていますか？」などの質問が次々と挙がり、「仕事以外だと月に2、3回ほどで、四国内の近場の山ばっかりですね」などと答えていました。

また、「車道も何にもない時代に、山頂まで人の手で植林を行なってきた事は、万里の長城やピラミッドに匹敵する、日本人のやり遂げてきた偉業だと思っています」とガイドを締めくくり、山頂を後にしました。

下山では、腰の高さ以上の笹もあり足元が見えない区間もあり、慎重に歩みを進め全員が無事に登山口までたどり着くことが出来ました。

今回の「かみめぐり」の参加者のほとんどは登山は初めての経験のようで、「絶景やった」「シーズンごとのイベントをして欲しい」などの声もあり、このイベントを通して山の魅力などを伝えられたのではないかと感じました。

最後に今年度も「かみめぐり」に協力する機会をいただき、関係者の皆様にはお礼申し上げます。今後もこのようなイベントへの協力を通じて、森林との関わりや楽しみ方など多くの方に広めて参りたいと思います。



「山は海の恋人」物部川流域の森づくり講演

〈高知中部森林管理署〉

10月30日、高知医療生協香南市支部から講演依頼があり、当署の森下首席森林官が「山は海の恋人『物部川流域の森林について』」と題して国有林の仕事や物部川流域の森づくりについて、講演を行いました。

このイベントの主催団体は「みんなが健康で住み続けられるまち」をモットーに、様々な活動や学習に取り組んでおり、この日は20名の方が参加され、笑いあり、感動ありの講演となりました。

はじめに、当署の管内概要を「たんね歩記」（森下作成）を使って紹介し、続いて森林の保全管理業務について、写真を交えながら説明しました。

話中、「（歩）の漢字は（止まる）と（少し）という字からできており、昔から、止まりながら少しずつ進むことを「歩く」と考えていたところだろう」と、自分の足でゆっくり歩くことで普段は気が付かない足元の草花や季節の変化に気づき、小さな幸せや色々な物事を見つけて感じることができるという話しには、誰もが大きくうなずき聞き入っていました。

また、近年は機械化で作業の効率化が進んでおり、ドローンを用いた資材運搬を紹介すると、その運搬技術に心を動かされたようでした。

次に森に住む動物たちと題して、シカやカモシカ、サル、ウリ坊等様々な写真を見せながら、可愛さ満載の一面だけでなく、植えた木を食べてしまったり、防護ネットを壊してしまう面もあり、特にシカは植えた木も下草も全部食べてしまうので悩みの種であることを伝えました。

講話は約一時間半でしたが、「あっという間に終わってしまった」と、参加者の心の声も漏れ聞こえていました。講演後の質問コーナーでも近年の山の情報や小話を加え、楽しく延長戦が行われました。

この小話の中の風邪を引いた時の対処法で、タヌキ油をアイスクリームと一緒に食べて治したエピソードは、この日一番の盛り上がりとなりました。

参加者からは「ずっと講話を聴いてみたいと思っていたから光栄です」「また話を聞きたい」などの声も多く、好評のうちに終えることができました。

今後もこのような講演や森林教室に積極的に携わり、山の魅力や林業の大切さについてより一層広められるような活動を行っていきたいと思います。

入林される皆様への注意事項

国有林に入林する際には、以下の事項について注意してください。
①草木やキノコなどの採取、樹木の伐採や損傷をしないでください。
②自然保護などのために立入が制限されている箇所へは入らないでください。
③ゴミは持ち帰りましょう。
④枯木や枯れ枝は危険ですので、近寄らないでください。
⑤タバコなど火の取扱いには十分注意してください。
⑥林道は未舗装箇所が多数あります。通行の際はご注意ください

登山は自己責任です。天候や登山情報を確認し、十分な装備で入山してください。また、ご家族へ行き先を告げるとともに、登山目的地を管轄する警察署等へ登山計画書を提出してください。

幡多農業高校生徒が環境学習をしながら三本杭へ登山

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

○概要

高知県立幡多農業高校から、昨年度に引き続き国有林で取り組んでいる自然再生事業の現地学習について依頼を受け、本年度もグリーン環境科3年生8名を対象に、野生鳥獣対策の必要性や自然環境問題について学習を行いながら三本杭登山を行いました。

○自然再生事業説明（黒尊山）

まず初めに黒尊山国有10林班の自然再生事業の説明をしました。シカ食害などにより成林が見込めない林地が散在している状況を踏まえて、各ボランティア団体等と連携し、有用樹の刈り出し、郷土樹種の植栽、遊歩道の整備等により、多様性のある森林再生を目指して取り組んでいることを説明しました。また、当地では、植栽した樹木が19年以上経過する中、シカ食害防止用の単木保護材が幹部分を圧迫しており、保護材を順次ラス巻きに交換していく必要があること、一昨年の3年生には保護材撤去作業を体験してもらったことも説明しました。

鹿防護網に落下した枯れ枝撤去と支柱修繕作業を体験

○自然再生事業学習（滑床山）

滑床山国有林のブナを主体とした広葉樹林分は、シカの食害を受けて植生が衰退し、林地荒廃に繋がる恐れがある場所であるため平成18年からシカ防護網や柵などを計17箇所、総延長5,620m設置してきたことを説明しました。また、柵の内側と外側で植生の繁茂状況が異なる状況を確認してもらい自然再生事業の重要性を理解してもらいました。

次に、植生の衰退によって裸地化が深刻な三本杭山頂付近において、関係機関やボランティアの協力も得ながら、ミヤコザサの移植作業やシカ防護網設置を行ったこと、また、当センターの定期的な保守点検作業などにより植生が回復した状況について過去との比較写真で説明を行うと、その回復ぶりに皆驚いている様子でした。

自動撮影カメラのデータ交換と設定確認作業を体験

○自然再生事業体験学習

帰路では、シカ防護網の点検作業や自動撮影カメラの設定などの体験を行いました。この作業体験により、植生の保護を確実に行うことが自然環境の維持につながり、国土保全の観点からも重要であることを理解してもらえたと思います。

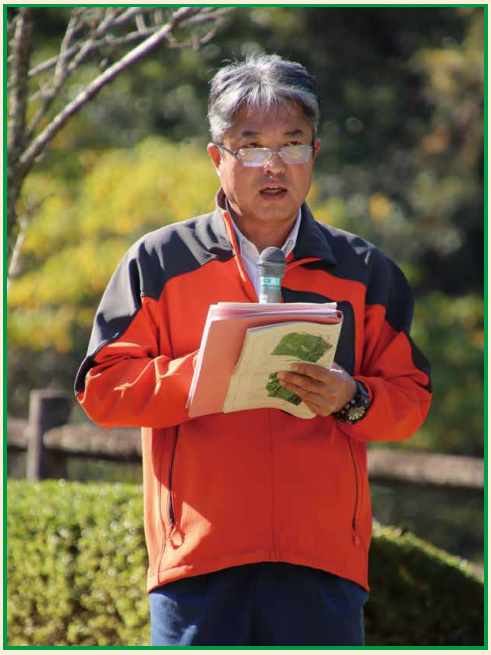
○おわりに

閉講式は、帰路途中の黒尊川キャンプ場前で執り行いました。実質半日程度で往復約5kmの登山などを行う強行スケジュールではありましたが、生徒達は皆満足気な表情をみせながら黒尊渓谷をあとにしました。

三本杭登頂記念撮影

1㎥を削り出せ

資源活用課長　原田　康弘



資源活用課長も最終年度、あと僅かとなりました原田です。

当課は、文字どおり資源を活用する業務を担当しており、四国森林管理局の主な収入源を担っている課です。

大きな役割は、木材の市況動向を踏まえたうえで、国有林材の供給調整機能を発揮しながら安定供給に努め、そのうえで、目標の生産量と収入額を確保していかなければならないという難しいかじ取りが要求されます。

また、最近では林業イノベーション化も求められており、常にアンテナを高く最先端技術の情報にも敏感でなければなりません。

四国局の屋台骨である当課の事業、その中でも収入確保を大きく左右するのが素材生産事業の発注になり、受注いただく事業体の協力なしには成り立たない事業でもあります。

令和2年度までは達成できていた指示量・収入額ですが、令和3年度以降は未達成という状況が続いています。

駅伝では1秒を削り出すためのたゆまぬ努力を1年間続けますが、私たちも目標に近付けるべく1㎥を削り出し、1円でも高く売り、1円の不用額も発生さないよう努力を続けています。公務員の使命として当然のこととして見られるかもしれませんが、木材供給量及び収入の確保には四国局の総力を挙げて取り組み、局署（所）担当者の皆様の日々の努力には頭の下がる思いで一杯です。この場を借りて感謝申し上げます。

目標に届かない要因は、いわゆるウッドショックもその一つでしたが、主な要因は公告物件に入札申請がなく不調となり、目標とする生産量に契約数量が大きく届かないことにあります。把握している事業体には滞りなく受注していただいていますので、事業体が足りていないということです。

この間、事業体のセット数の減、林業従事者の減少に歯止めが利かなく、経営者は「生産性向上の取組より、従業員が辞めないようにすることが大きな課題だ」と言います。

こうした事業体の悩みに少しでも支援になればと、事業体の経営安定化に資する複数年契約事業の拡大にも取り組んでいるところです。

最後に、年度末が近づき慌ただしい時期を迎えますが、何よりも怪我・病気無く仕事ができることが一番だと思っています。今日も美味しいビールが皆で飲めるように（お酒がダメな人は美食で）頑張ります。

管内の見所紹介

〈香川森林管理事務所〉

【飯野山（讃岐富士）】

香川県坂出市、丸亀市両市境に県民から讃岐富士と呼ばれ親しまれている飯野山（飯山国有林）があります。

裾野がなだらかな富士山型の山頂は、標高４２２ｍと片道約１時間程度で登れる気軽さながら、穏やかな瀬戸内海や讃岐平野が一望でき、ハイキングや健康増進にと子供からお年寄りまで大勢の利用者が訪れています。

多くの登山者が訪れる飯野山ですが、一たび大雨が降ると登山道を水が流れて荒れてしまうことが利用者の悩みの種となっていました。そこで香川所では、道の補修用に登山道入口に小石や土を用意し、登山道補修に利用者自ら参加いただく「一日一石運動」に、平成29年から丸亀市、坂出市、地域の愛好家の皆様と協力して取り組んでいます。多くの皆様に御協力いただき、運動開始以降はとても歩きやすい登山道が維持されています。

豊作から望む飯野山

【屋島】

高松市の東側に位置する屋島は平らな山頂部分が３km以上続く屋根の形をした溶岩台地からなる半島です。山頂からは高松市内や瀬戸内海が一望できる観光スポットで、山頂部の寺院や観光施設などを除く大半が国有林となっています。

今から約８００年前、源平合戦が繰り広げられた当時はその名のとおり島だった屋島もその後地続きとなり、現在でも半島東側の壇ノ浦周辺には平家が軍船を隠した「船隠し」や、那須与一が扇の的の矢の命中を祈った「祈り岩」など合戦の逸話を伝える史跡が数多く残っています。

世界の宝石瀬戸内海と屋島

屋島北嶺と南嶺そして瀬戸内海

また、半島先端の長崎の鼻には、１８５３年にペリーが浦賀に来航した事件をきっかけに、当時の高松藩主松平頼聴が幕府からの命を受けて、瀬戸内と高松の港を守るために築いた砲台跡も残されています。小豆島など瀬戸内の多島美や行き交う船を眺められ、若者にも人気のフォトスポットとなっています。

その他にも当所管内国有林には、ロープウェーが整備され初夏のアジサイ、秋の紅葉などが楽しめる四国霊場第六十六番の雲辺寺（観音寺市）や、戦国時代に築城され今も石垣や郭跡がみられる国の史跡に指定されている引田城址（東かがわ市）等、史跡名勝がたくさんあります。

香川県、角を曲がればうどん屋に当たりますが、うどんばかりではありません

今年指定から90年を迎えた瀬戸内海国立公園でもある、風光明媚、温和な気候で名所旧跡、景勝地の多い当地へぜひお越しください。

引田城跡、奥に見えるは小豆島